

# 英米社会学における デュルケーム社会学理論の受容の研究

馬場 明 男

戦後、私は自分の専攻をアメリカ社会学の研究に置いているが、最近、アメリカ社会学が形成されたその初期にはヨーロッパからの思想文化が強い影響を与えたことを知り、こうした事情に興味をもつにいたつたのである。その一つの現われとしてアメリカ社会学とドイツ社会学の交流の問題をとりあげ、最近ジンメルを中心としてこの問題の研究を発表したのであった。（日本大学社会学研究室機関誌「社会学論叢」六七号所載拙稿「アメリカ社会学とドイツ社会学の交流」参照）

本日の私のさやかな研究発表のテーマは「英米社会学におけるデュルケーム社会学理論の受容の研究」であるが、こうした問題の研究について若干報告することも決して無駄でないであろう。

私がこのような問題《英米社会学におけるデュルケーム社会学理論の受容》に関心をもつようになったのは、デュルケームⅡジンメルという二人の著名な社会学者の生誕一〇〇年を迎えた一九五八年の時点であつた。そのころ私は日大社会学科の主任教授であつたが、私が監修していた研究室の機関誌「社会学論叢」の第十二号をデュルケームⅡジンメルの生誕一〇〇年記念号にあてたのであつた。この特集号の巻頭論文として恩師銅直勇先生を煩わし「デュルケームの社会学」を、同じく故杉山栄教授を煩わして「ゲオルク・ジンメルの小伝とその社会学説」をお願いし、いずれもこの二人のヨーロッパの碩学に関し、卓越した記念論文を執筆していただいたのであつた。同じこの十三号には日大教授の齊藤正二君による「ジンメル社会学のわが国に及ぼした影響」を執筆して貰つた。更にアメリカのシカゴ大学が十九世紀の終りごろ発行して今日まで七〇年間以上も継続して発行して

いる世界的な学術雑誌 "American Journal of Sociology" の、同じく一九五八年の五月号でデュルケムⅡ ジンメル の記念号 (Durkheim-Simmel Commemorative Issue) を発行していたのが、その内容が  
いずれも有益な労作であったので、これら諸論文の概要を私の教え子早川浩一君 (日大教授) に紹介して貰った  
のであった。この特別号の目次を示すと次の通りである。

エミール・デュルケムとゲオルク・ジンメル

ペーター・H・ロシイ

愛着と疎外——デュルケムとジンメルの業績の補足的側面

カスパー・D・ナーゲル

デュルケムとジンメルの挑戦

カート・H・ウオルフ

交換としての社会行動

ジョージ・C・ホームマンズ

デュルケムの「自殺論」と経験的調査の問題

ハナン・C・セルビーン

社会形態学と人間生態学

レオ・F・シノーレ

ゲオルク・ジンメルの研究のスタイル——社会学者の社会学への一寄与

ルイス・A・コーザー

ジンメルからの小集団についての若干の仮説

テオドル・M・ミルズ

自殺・他殺と攻撃性の社会化

マーティン・ゴールド

エミール・デュルケム——固定的心理学的要素の反対者

ハリー・アルパート

この記念号 (論叢) に私も拙文を掲載した。デュルケムⅡ ジンメルの社会学理論が日本大学社会学科の学問  
的形成過程と密接な関係があったので「デュルケムとジンメル——日本大学社会学史」という題名であった。  
当時日本大学の専任者だけでデュルケムⅡ ジンメルの生誕一〇〇年記念号を編集できたことは私としては実に  
満足なことであって、研究室の同人だけでこの偉大な学者を偲ぶことができたと同時に、学界への貢献が多かっ  
たことを多くの人々に認識して貰ったと思う。

一九六〇年代以後は世界情勢は安定し、各国とも世界戦争の痛手から恢復するようになって、経済成長の促進

によって学問体制も次第に整うようになった。それとともに各国の社会学も、あるものはアメリカ社会学に歩みより、あるものはソヴェト・マルクス主義的社会科学の方向に歩みよったのであった。アメリカ社会学の側に属する各国にあっては、その研究のうちで力点を置くようになったものはマックス・ウェーバーの研究であった。こうした傾向にたいし、かつて私は次のように述べたことがあった。

一九六〇年代のアメリカ社会学界の情况は古典的社会学者もしくはそれに近い社会思想家に関する、ゆたかな研究成果が生れた年であった。アメリカ社会学会が丁度このころ社会学史の部会をもったことでも、その研究方向に新しい傾向が現われたことを示しているし、これは過去の社会学者の学問に反省を加えようという新しい問題意識のあらわれであるとともに、これまでのアメリカが過去に拘泥しない、歴史意識を欠如していたのにたいし、強い歴史意識が成長し、伝統にたいする回想が生れたことを如実に示しているのである。

アメリカ学界やわが国の学界で、M・ウェーバーがとりあげられた時期は、ウェーバーが逝去してから三〇年経過した一九五〇年の前後であった。この時期にガースによるウェーバーのバイブリオグラフィが作られたり、ウェーバーの労作が英訳されたりした。わが国でも、ウェーバー復興といわれたほど、ウェーバー研究が最も活気を呈したのもこの頃であった。その後ウェーバーが死去してから五〇年も経過したにも拘らず、ウェーバーにたいする研究熱は劣えるどころか、益々盛況を呈してきたが、それを代表するものは、ベンディックス教授の「マックス・ウェーバー」(Max Weber: An Intellectual Portrait)である。この著書に関しては拙稿「政治社会学の諸問題」(「社会学論叢」一八号所載)である程度紹介したから、ここで詳しく述べることを避けよう。ベンディックスの本書は難解なウェーバーの思想体系をアメリカ人に理解させたばかりか、本書の邦訳はわが国のウェーバー研究にも大きな意義をもっていたといえるであろう。ウェーバーがこのように問題となったのは、現代社会の動向にたいし鋭い示唆を与えていたし、とくに現代社会の官僚化を正確に予知した見解だけでも、ウェーバーを問題にしないわけにはいかなかったのである。(拙著「社会学論叢」所載「アメリカ社会学

# 一 一九六〇年の回顧と展望」参照)

一九六〇年代の以後、アメリカ社会学界はウェバーの研究以外に、ヨーロッパの著名な社会学者の研究を盛んに行った。その代表的なものはデュルケムとジンメルの研究であった。これら有名な学者たちの社会学から多くの理論を吸収したアメリカの社会学界は、その中からいくつかの学説のモデルを形づくるようになったのである。これらのモデル理論をこで詳細に叙述することは時間の関係で許されないが、こうした分野ですぐれた成果をしめした英米の学者を列記しよう。アーヴィング・M・ツァイトリン、ジョナサン・ターナー、ウィリアム・スキッドモア等である。このうち最も興味あるものはツァイトリンの研究である。彼は一九六八年に「イデオロギーと社会学理論の発達」を世に問うていた。その中で、啓蒙主義というテーマのもとにモンテスキューとルソーを扱っていた。ツァイトリンはこの二人を社会学の先駆者とみなしているが、デュルケムもこの二人を社会学の先駆者としてとりあげていた。デュルケムの「モンテスキューとルソー」(一九六〇年英訳)には、ダービイの「デュルケム、モンテスキューとルソー」という小論とキュービリーエによるノートが掲載されていた。とくに後者は、モンテスキューとルソーの二人が、現代社会学の起源に関する歴史研究にたいし大きな貢献をなした点を強調していた。「イデオロギーと社会学理論の発展」を書いて特色ある社会学思潮史を展開したアーヴィング・ツァイトリンは、一九七三年に本書の続編ともいべき「社会学を考え直す」(Rethinking Sociology)という著述を発行した。そのサブタイトルに「現代社会学理論の批判」とあるように、全体としては現代アメリカ社会学界を支配している社会学の主潮を要領よくまとめたものであった。まさに本書は、過去の社会学理論を学史的に辿ったものでなく、現代社会学の思潮を鳥瞰図的に示したものである。彼の「社会学を考え直す」は一九六八年に上梓された「イデオロギーと社会学理論の発展」との深い連関の上に立ち、現代社会学の体系的研究によって社会学史的研究の目的と意味を明示したというべきであろう。この「社会学を考え直す」という著述を出版した意図は社会学理論の総合を発展させるため、現代社会学のうち主要な理論を丹念に注意深く

研究することに重点を置いたもので、彼が示した五つの社会学理論は、

一、機能主義もしくは構造的機能主義

二、社会交換理論

三、闘争理論

四、現象学およびエスノメソドロジー

五、象徴的相互作用

ツァイトリンはこれらの諸学説を精細に研究することによって、最終的にはマルクス、ミード、フロイトの三人の思想を統合させ、有効な社会科学の確立を試みたものである。（「社会学論叢」六十二号所載拙稿「一九七〇年代の社会学史研究とその周辺」参照）。このツァイトリンの著書が発行されてから遅れること一年、一九七四年にジョン・H・ターナーの「社会学理論の構造」(The Structure of Sociological Theory, 1974)を読むことができた。ツァイトリンの諸著を主たる参考文献として拙稿「一九七〇年代の社会学史研究とその周辺」の原稿を脱稿したばかりであったため、ターナーを参考とすることはできなかったが、「周辺」の終りのところに次のように付記して置いた。「アメリカ社会」という名著を書いたウィリアムズとの関係を述べてから、「ターナーの『社会学理論の構造』は純粹な社会学的文献とはいえないにしろ、とり扱ったテーマを丹念に調べてみると、そのいずれも理論史的展開の上に研究を押し進めている。彼がこの著書でとりあげたテーマは機能主義、闘争理論、相互作用及び交換理論という四つの社会学理論の成立の歴史的経過と現代の理論的側面の研究を書いたものである。彼の理論構成をツァイトリンのそれと比較してみると、深い思索と省察の上に立っているということが出来る。」ツァイトリン、ターナーおよびニューブルンスウィッツ大学のウィリアム・スキッドモアによって同じようなモデル理論が展開されていた。スキッドモアは一九七五年に出版した「社会学における理論的思考」(Theoretical Thinking in Sociology)で社会学理論における重要な問題、社会学に

おける諸理論のタイプと証明の問題に言及してから、交換理論、機能主義、象徴的相互作用それとエスノメソドロジをとらあげ、相当厳格な理論的追求を試みてから、更にこれらの学説を拡大強化するために「人間についての社会学のモデル理論」(Sociologys' Models of Man 1975)を書き、このすぐれた論文のうちでホームズの交換理論、パーソンズの機能主義、ミードの象徴的相互作用に触れたが、この著書の目的はこの三つの社会学の理論に存在する人間のモデルと社会組織との関係を体系的に追求したものであった。

こうした学問の流れに棹さしたわけでもないが、この一九五八年のデュルケム＝ジンメル誕生一〇〇年記念号の発刊から丁度一〇年経過した一九六八年の暮に、私は「アメリカ社会学におけるジンメル＝デュルケム思想の展開——一〇〇年記念以後」(「社会学論叢」四十三号所載)を書いた。

この標題が示すように、先ずアメリカ社会学とドイツ社会学との密接な関係、例えばジンメルの思想の摂取の問題をアメリカ社会学界の中でも特異な存在であるコーザーとジンメルの関係を示したのである。(注)

(注) コーザーがジンメルの社会学からいかに影響を受けたかは叢書「現代社会科学をつくった人々」の一冊として彼が編集した「ゲオルク・ジンメル」があることでも明らかである。本書の序論はコーザーが書いたものである。ここではジンメルの社会学への接近、形式社会学、ジンメル社会学における弁証法、社会生活にたいする数の意味、現代文化の相容れぬ見解、ジンメルの影響などについて述べている。とくに最後の項目ではマートンとジンメルの関係をとりあげ、微視的社会学にたいするジンメルの影響を明らかにまとめたが、巨視的社会学理論、社会体制論にたいする影響は明瞭でない。しかし社会闘争理論がジンメルによって明瞭にされたことを明らかにしていた。とくにコーザーは彼の著述「社会闘争の機能」が大部分この問題にたいするジンメルの見解を明らかに体系づけようと努力したことを強調していた(「社会学論叢」所載、四三号二頁参照)。とくにコーザーがジンメルを高く評価した理由はジンメルが社会学において展開した「争闘理論」を重要視した点である。

アメリカの社会学が社会争闘を重要なテーマとしたのは一九〇七年の学会であった。これには社会ダーウィニ主義者であるトーマス・N・カバーが報告を行った。さらに社会争闘が主なるテーマとしてとりあげられた機会は、一九三〇年のアメリカ社会学会第二十六回の年次大会であって、ここではハワード・オードムが会長就任演説の中で、社会争闘の社会学がとりあげられるべきことを強調したにも拘わらず、このテーマはたいして問題とはならなかった。それから二十年ばかり経過した一九五〇年ジェシー・バーナードはアメリカ社会学雑誌（A・J・S 五六号）においてスモール、パーク、ロスのような先駆者たち以来、ジンメルが扱った争闘の科学的研究をとり残していることに言及していた。アメリカ社会学者がその研究領域から争闘を無視するようになったのは、少なくともアメリカ社会学者の自己映像（セルフイメージ）に生じた変化の結果である。コーザーによると、注意の焦点が争闘より合意（Consensus）のような社会学的研究分野に移ったからだということを強調していた。アメリカ社会学は一九六〇年代になると争闘理論を強力的にとりあげるに至った。以上のように一九五八年以後、ジンメル―デュルケム生誕一〇〇年記念を機会に、この二人の社会学の研究は次第に盛況を帯びてきた。デュルケム研究も一九六〇年代からアメリカ学会で頓に盛んになった。それを挙げると次の通りである。

Alpert, Emile Durkheim and his Sociology, 1960

K. H. Wolf, Emile Durkheim, 1858—1917, 1960

E. A. Tiryakian, Socialism and Existentialism, 1962

G. Simpson, Emile Durkheim, 1963

R. A. Nisbet, Emile Durkheim, 1965

R. A. Nisbet, Sociological Tradition, 1966

デュルケムの社会学が他のヨーロッパ社会学思想とともにアメリカに導入され、それがアメリカ社会学のうちに全面的に受容されるまでにはそう古いものではなかった。この点個人主義的原理にもとづいているガブリエ

ル・タルドの方が遙かに早くアメリカ社会学に移植されたのは当然であらう。

デュルケム社会学がアメリカに移入され、アメリカの学界に受け容れられたことを問題にしていたロスコー・C・ヒンクルによると一九四〇年以前の半世紀に亘る歴史的経過を一八九〇—一九一七年、一九一八—一九二九年、一九三〇—一九三九年の三つの時期に区分していた。一八九〇—一九一七年の第一期にあつては、デュルケムはアメリカの社会学者——例えばサムナー、ウォード、ギディングス、スモール、クレーイ、ロスなどには全般的には知られていなかった。「初期学者がデュルケムに抱いていた判断は極めて消極的であつた」(Kurt H. Wolff, *Emile Durkheim*, 1858—1917, p. 268)。このころのアメリカの学者がせいぜいデュルケムを組織的に取扱つたのはルシアン・ムーディ・ブリストルとチャールス・エルマー・ゲールケの二人の学位論文であつた(注)。彼らのデュルケム社会学の受容はすばらしいものであつたにも拘わらず、アメリカの伝統的個人主義と矛盾するため、デュルケムの集団概念にたいしては、むしろ強い批判を与えていた。

第二期(一九一八—一九二九年)にあつても、アメリカ社会学はシカゴ大学を中心に活気を呈していたにも拘わらず、デュルケム社会学にたいする認識はそう目だつたものではなかつた。第一次大戦後一〇年間、アメリカ社会学界にもデュルケムを再評価する声が生じた。この変化は直接的にも間接的にも、方法論に関する論争から生れた。

アメリカ社会学には心理的に重点を置いた時代があり、とくに、本能論が優位の時期があつた。その後この傾向から離脱するようになった。アメリカ社会学が科学化するためには一元主義が清算されなければならなかつた。社会学も社会行為を説明するために、本能論を排撃し、文化人類学と接近、ミードの使用した象徴的相互作用の受容、帰納的客観的研究の強調などの諸傾向は、デュルケム社会学への歩みよりを可能ならしめた。

アメリカ社会学の発展の第二期の終りもしくは第三期の初め、デュルケムの研究熱は高まつてきた。この時期に価値ある論文があつた。例えばパーソンズの「社会行為の構造」マーティンの「社会理論と社会構造」などは、



たしかにアメリカ社会学者をしてデュルケームの学問的価値の認識を決定的なものとした。(注)ゲールケの「社会学理論にたいするデュルケームの貢献」(一九一五)はコロンビア大学出版部より発行されたもので、私も昭和初期これをテキストにした銅直先生の演習の指導を受けたことがあった。厳密にいうと、ゲールケの本書はデュルケームをアメリカ社会学界に組織的に紹介する役割は大きかったが、ヒンクルは「アメリカ社会学中でのゲールケはデュルケームの理論的矛盾を思い切って批判している」と述べていた(ウォルフのデュルケーム論所載、ヒンクルの論文二七〇頁参照)。

一九五八年のデュルケームⅡジンメル誕生一〇〇年記念以後、英米両国においてデュルケームに関する研究が盛んになったことは前述の通りである。単行本として代表的な著書は一九六〇年ブランドイス大学のクルト・H・ウォルフが編集した「エミール・デュルケーム——一八五八—一九一七年」である。これには私のもう一人の恩師蔵内数太先生が「日本社会学へのデュルケームの影響」を寄稿されておられた。とくに私に興味をもたした論文はルイズ・A・コーザー(この頃はアメリカを訪問したがバークレイの加州大学で彼と会見し、帰国後名著「社会争闘の機能」を贈られた)の「デュルケームの保守主義と彼の社会学理論にたいする意義」という論文であった。

デュルケームが思想的に保守主義的であるのは、オックススキもその階級論で触れていたし、デュルケームの協力者であるモースもデュルケームの「社会主義とサン・シモン」の英訳本の序文で明らかにしていた。ウォルフのデュルケーム生誕一〇〇年記念論文集に載せたコーザーの「デュルケームの保守主義と彼の社会学理論にたいする意義」は、その後コーザーが一九六七年に出版した「社会争闘の研究における続編」(Continuities in the Study of Social Conflict, 1967)の第二篇の「社会学理論と社会争闘」のうちに再録している。かつてアメリカの黒人問題を書いて多くの称讃を拍した名著の一つである「アメリカの矛盾」(American Dilemma)を書いたガンナー・ミルダールは本書においてサムナーを鋭く批判したことがあるが、コーザー

もデュルケムとサムナーの同じような誤謬は、社会の階級現象の正しい認識をなし得ないことを指摘していた。勿論デュルケムは社会主義理論を全く無視したわけではなかった。彼の友人には第一次大戦の勃発直前フランスで殺されたジャン・ジョレスがいたほどであるが（注一）、モースの言葉を借りると「デュルケムは甚だしく階級争闘に反対した……彼は全体社会の利益になるような社会変化のみを願っていた」（モースの社会主義の序文）。それ故デュルケムは、サン・シモンについて該博な知識を示していたように、サン・シモンの調和主義的社会主義を愛好していたのである（注二）。

（注一） ジョレスとデュルケムの関係については拙稿参照「社会学論叢」四三号所載。

（注二） デュルケムの政治社会学に関しては「社会学論叢」五八号所載拙稿参照、ウォルフの「デュルケム」所載のリヒター「デュルケムの政治学と政治理論」参照。

その後デュルケムに関するいくつかの著述が相次いで発行されたが、その代表的なものはエドワード・A・ティリヤキンの「社会学主義と実存主義」ニイスベットの「エミール・デュルケム」（叢書 現代社会学を創った人々）シンブソンの「エミール・デュルケム」である。このうちティリヤキンの該書は「個人と社会」という名称でみずす書房から邦訳されている。彼は一九五二年プリンストン大学を卒業してからハーバード大学の大学院に進学し、ソローキン、パーソンズの指導をうけた。現在はハーバード大学の社会関係学部に勤務している。ソローキン教授の関係からソローキンの記念論文集「社会学的理論、価値および社会的文化変動」

（Sociological Theory, Values and Social Cultural Change, 1963）の編集者でもあった。とくにティリヤキンが本書の第一部デュルケムの社会観を論じているが、その項を終ろうとするとき「デュルケムの社会学主義は、現代の世界における社会の意味を、あらためて強調するひとつの試みとみなしてよいであろう。そして、それは社会の意味をあらためて主張するという過程のなかで、個人の擁護者にもなる。つきつめていえば、社会学は社会学にたいするひとつの貢献以上のものであるといっても過言ではないのだ。すなわ

ち、人間における社会的なるものとは何か、あるいはひとつの社会的存在としての人間とは何か、を追求し秤量することによって、それは、哲学的人間学にとってひとつの永遠の貢献となっているのである」(邦訳書一〇五頁参照)。これはいろいろと示唆多い言葉といふことができよう。

私は本年度、当明星大学の大学院博士課程においてニスベットについての私のささやかな研究を講義しているが、日本大学社会学研究室内の「社会学論叢」に「アメリカ社会学とニスベット」の前半を掲載したが、このニスベットの最近の仕事はコーザーと共にマートンの記念論文集「社会構造論」(「社会学論叢」参照)の編集をし、本書に一文を寄稿している。

ニスベットの「エミール・デュルケム」は、叢書「現代社会学を創った人々」の一冊であつて、このシリーズはコーザー編者の「G・ジンメル」、マイセル編著の「パレートとモスカ」がある。ニスベットの「エミール・デュルケム」はニスベット自身の論文と過去三〇年間デュルケムの社会学に対し、英米の有力な学者——マートン、C・セルビン、アルパート、ギンスバーク、ペラー等のそれぞれの専門的分野に関する批判的見解を載せたものである。ニスベットの「エミール・デュルケム」は、デュルケム社会学にたいするアメリカの知識人の新しい認識と理解を喚起させたばかりか、生誕一〇〇年(一九五八年)後に出版されたデュルケム研究書として高く評価できよう。ニスベットはこの「デュルケム論」を書いた翌年(一八六六年)彼の畢生の名著として多くの学者から注目されている「社会学的伝統」(Sociological Tradition, 1966)を出版したが、この「社会学的伝統」において社会学理論を構成する五つの重要な概念(キイ・コンセプト)であるコミュニティ、權威、地位、神聖、疎外の諸観念を選んで、これらに精密な説明を与えた。彼がこうして諸観念を設定するにはデュルケムの社会学理論からの強い影響のあつたことは否定できない。

ニスベットの「社会学的伝統」が社会学思想史研究にとって重要な示唆と見解を披瀝しているといふことができるのは、彼がアメリカの有力な歴史学者アーサー・オンケン・ラヴジョイの書いた「存在の大きい連鎖」

(The Great Chain of being: A Study of the History of an Idea, 1936) から学んだ単位概念 (Unit-Idea) を提起したことであった。その後ニイスベットは一九七四年「エミール・デュルケームの社会学」を書いた。この著書によって彼はアメリカにおけるデュルケーム研究の地位を確たるものとしている。(注)

(注) 私は「アメリカ社会学とニイスベット」という拙稿の前半を「社会学論叢」に掲載しアメリカ社会学界におけるニイスベットの地位が決定的であることを書いたが、この原稿の後半は近く載せる予定であるが、この原稿の最後の章はニイスベットのデュルケーム観について言及したものである。

アメリカ社会学はヨーロッパ社会学に比較し、一層科学的であり、実証的であるだけに、デュルケームの社会学を摂取するときに、とくにデュルケームの「自殺論」にたいし特に関心をもつのは当然であるが、このことはイギリス社会学にあっても同じである。

イギリス学界にあつては、デュルケームの社会学思想に強い関心を注いでいるのはアンソニー・ギデンスである。彼は「資本主義と現代社会理論」でウェーバーとともにデュルケーム社会学を展開し、デュルケームの自殺論はデュルケームの社会学的方法の項で扱っているが、近代社会における道德の欠如 *Lack of* *La cuna* の性格を描き出そうとする試みが「自殺論」でのデュルケームのもつとも基本的関心事であることを指摘していた。ギデンスには本書以外に一九七三年にデュルケームの選集を発行し、デュルケームの重要な論文を英訳し、デュルケームにたいする新しい認識と研究の雰囲気をもりあげていた。さらに「イギリス社会学雑誌」(一九六五年)にも「フランス社会学における自殺問題」をとりあげていた。イギリス社会学界にあつてギデンスのほか、とくにデュルケームの自殺論を高く評価したのはメッヂであった。彼は既に一九六三年に出版した「科学的社会学の起源」(The Origins of Scientific Sociology) の中でデュルケームの自殺論を冒頭に出し、デュルケームの「自殺論」はデュルケームが試みた経験にもとづく最初の研究ではないが、しかし、社会学的問題に統計的方法を適用した最初の労作であることを認めていた(メッヂ「科学的社会学の起源」一二頁参照)。

私も「イギリス社会学におけるウェーバー—デュルケームの研究」(社会学論叢五八号)において、自殺に関する研究の系譜的考察を試みたが、とくにアメリカにあつて自殺論を歴史的に研究したのは一九六七年プリンストン大学出版から出版されたジャック・D・ダグラスの「自殺の社会的意味」(Jack D. Douglas, *The Social Meaning of Suicide*, 1967) が比較的まとまった研究である。その後自殺という社会現象が決して全く無くなつたわけでないだけにこの問題の研究も跡をたつたとはいえない。最近の新しい研究では、シカゴ大学出版から「デュルケームの自殺論」(Whitney Pope, *Durkheim's Suicide*, 1976) について書いたホイットニー・ポープの著述などはすぐれた力作であるが、この問題に関しては又他の機会に論及したい。

(一九七七・一・一〇)

〔あとがき〕

本年の明星大学人文学部社会学科の研究発表会(一月二十二日)に私が参加した理由は、私の恩師である銅直先生が八十九才を迎えられた今日でも元気一杯で学生諸君の指導にあたられておられる姿を拝見し、私の喜びの一端をこの会で示したいのと、更に私のフランス社会学にたいする研究が若い頃の先生の指導によって開始され、今日までもその研究意欲を継続してもつように激励してくださったことを思い出し、昨年の四月、日本大学から明星大学に移つてまだこの大学に慣れないのにあえて発表させて貰つたのであります。